

# 植民地期朝鮮における マルクス主義伝播 1920~1921

小野 容照

---

はじめに

- 1 朝鮮内における共産主義グループの結成
- 2 1920年, 新思想・新理論の模索
- 3 兪鎮熙のマルクス主義受容
- 4 1921年, 本格的マルクス主義伝播—マルクス主義とボリシェヴィズムの同時紹介  
おわりに

はじめに

ソ連崩壊を契機として, コミンテルンの朝鮮関連資料が公開されて以降, 植民地期の朝鮮社会主義運動に関する研究は韓国で飛躍的に進展した(日本ではそれほど進んでいない)。とくに, 高麗共産党や朝鮮内の各共産主義グループ, そして思想団体に関する研究が相次いで発表されたことにより<sup>①</sup>, 朝鮮社会主義運動の運動史的起源に関する分野で多くの歴史的事実が明らかになった。反面, 社会主義運動の理論的指針となるマルクス主義の伝播, 受容に関する研究蓄積は微々たるものであり, その大半は当時の朝鮮社会主義者が書き残した文章の分析を通じて, 朝鮮社会主義者がマ

- 
- (1) 韓国において, 著書及び博士論文のかたちで発表された代表的研究としては, 전명혁『1920년대 한국 사회주의 운동연구 서울과 사회주의그룹의 노선과 활동』선인(チョン・ミョンヒョク『1920年代韓国社会主義運動研究 ソウル派社会主義グループの路線と活動』ソニン), 2006; 임경석『한국 사회주의의 기원』역사비평사(イム・キョンソク『韓国社会主義の起源』歴史批評社), 2003; 이현주『한국 사회주의세력의 형성 1919-1923』일조각(イ・ヒョンジュ『韓国社会主義勢力の形成 1919-1923』一潮閣), 2003; 박哲河(パク・チョラ)『1920년대 사회주의 思想团体 研究』崇実大学校博士学位論文, 2003 などがある。
- (2) 박종린『日帝下 社会主義思想의 受容에 관한 研究』延世大学校博士学位論文(パク・チョンリン『日帝下社会主義思想の受容に関する研究』延世大学校博士学位論文), 2007; 이・ヒョンジュ, 前掲書, 125-132頁; 류시현「사회주의 사상의 수용과 대중운동」『한국 공산주의 운동사연구』역사학연구소(リュ・シヒョン「社会主義思想の受容と大衆運動」『韓国共産主義運動史研究』歴史学研究所), 1997; 同「1920년대 전반기 조선의 사회주의 사상 수용과 발전」『民族史의 展開와 文化』下巻, 창작과 비평사(同「1920年代前半期朝鮮の社会主義思想受容と発展」『民族史の展開と文化』下巻, 創作と批評社), 1990。

ルクス主義を受容するに至る内的契機や、彼らが当時抱いていたマルクス主義認識を解明しようとするものであった<sup>(2)</sup>。そのため、植民地期の朝鮮に西洋起源のマルクス主義に関する文献や学説がどこから流入したのか、そして朝鮮社会主義者は具体的にどのような文献を通してマルクス主義を学び、それらを朝鮮で紹介していったのかという問題はほとんど明らかになっていない<sup>(3)</sup>。

本稿は、朝鮮の活字媒体において本格的にマルクス主義学説の紹介がなされはじめる1920～1921年を対象に、当時朝鮮に流入したマルクス主義学説と文献、及びそれらを活用して活字媒体でなされたマルクス主義学説紹介の具体的状況を解明しようとするものである。本論に入る前に、まず同時代の中国における事例に関して述べておきたい。

中国において本格的にマルクス主義学説の紹介がはじまったのは五・四運動時期であるが、その大半が日本を経由してなされたことが明らかになっている<sup>(4)</sup>。結論から先にいえば、中国と同様に、本稿の対象時期に朝鮮社会主義者によって執筆されたマルクス主義関連記事は、その大半が日本書からの翻訳、乃至は引用したものであった。中国と朝鮮において日本を経由したマルクス主義学説紹介が、それも近接した時期に本格的になされるという現象が生じたのは、日清戦争以降、日本が東アジアにおける西洋近代思想受容の中継所として機能しはじめ、とりわけ漢字文化圏においては近代的な概念や学術用語をはじめとする日本で翻訳された漢字用語（以下、日訳漢語）が共有されていたことが大きな要因であろう<sup>(5)</sup>。

後述するように、朝鮮におけるマルクス主義伝播ルートは日本経由に限定されていたわけではない。しかし、朝鮮で紹介されたマルクス主義学説の大半が日本書からの翻訳や引用であったという

---

(3) パク・チョンリンの最近の研究(박종린 「1920년대 초 공산주의 그룹의 맑스주의 수용과 ‘유물사관요령기’」 『역사와 현실』 67(パク・チョンリン 「1920年代はじめ共産主義グループのマルクス主義受容と‘唯物史観要領記’」 『歴史と現実』 67), 2008)によって、朝鮮内の合法媒体において初めて記載されたマルクス主義原典『経済学批判』序文が、堺利彦からの重訳であったことが明らかになった程度である。

(4) 中国におけるマルクス主義受容に関しては、石川楨浩『中国共産党成立史』岩波書店、2001の第一章参照。なお、本稿を執筆するに当たって、石川楨浩氏の研究から多くの示唆を受けた。

(5) 東アジア諸国が西洋近代文物を摂取する際、日本がその中継所として機能していく過程に関しては、山室信一『思想課題としてのアジア』岩波書店、2001参照。なお、同書の第二部第七章第三節では、日訳漢語が東アジアにおいて共有されていく過程に関して、とくに中国での事例を中心に詳細な分析がなされている。朝鮮の場合、1900年代初頭の啓蒙運動時期に、日訳漢語と中訳漢語の両方を使用していた梁啓超らの著作を通して近代学術用語が流入しており、日訳漢語が朝鮮で完全に定着するのは、在日留学生が雑誌『学之光』などを通して西洋近代思想を紹介しはじめる1910年代だと推測されるが、これに関する本格的な研究はまだ発表されていない。

また、朝鮮におけるマルクス主義伝播が日本を経由してなされた原因としては、日訳漢語の共有とともに、3・1運動以降に朝鮮で社会主義者として活動していく人物の多くが、それ以前に日本に留学していた点を挙げることができる。本稿で名前が登場する社会主義者のうち、金明植、金鏗洙が早稲田大、李増林、孫斗煥が明治大、金翰が法政大、朱鐘建が東京帝國大、金若水が正則英語学校にそれぞれ留学しており、留学生ではないが、鄭泰信の場合は1910年代に大阪で横田次郎、長谷川市松らアナキストと交流していた。現在筆者は1910年代の在日朝鮮人留学生の思想形成と日本思想界との関連に関して調査しており、いずれ日訳漢語の問題についても発表したいと考えている。

事実は、朝鮮社会主義者がマルクス主義を理解し、それを紹介する際、日本から流入した「知」の占める比重が何よりも大きかったことを意味している。そうであるがゆえ、朝鮮においてマルクス主義学術用語は、それらの訳語創出に対する思想的営為のないままに、朝鮮の活字媒体で初めて登場したときから日本で翻訳されたマルクス主義学術用語が使用され続けた<sup>(6)</sup>。

したがって、朝鮮におけるマルクス主義伝播は、東アジアにおける日本を中継所とした西洋近代思想受容史の文脈の中で理解されるべき事象であろう。こうした問題意識のもと、本稿では、同時代にマルクス主義伝播の結節点として機能していた日本の思想界と朝鮮との連環、日本経由でマルクス主義が伝播した中国と朝鮮における事例との差異などにも注目を払って、論を進めることとしたい。

## 1 朝鮮内における共産主義グループの結成

韓国併合以来最大の抵抗運動であった1919年の三・一運動は、日本の植民地政策に方向転換を促した。植民地政策が従来の武断統治から文化政治に転換した結果、制限的ではあったものの、『東亜日報』（1920.4）、『開闢』（1920.6）、『共済』（1920.9）をはじめとする出版物の発行が朝鮮で許可された。一方、三・一運動をもってしても独立がなしとげられなかったという事実は、独立運動家や知識人に民族独立のための新たな理論的模索の必要性を認識させ、彼らは活字媒体を活用して、ラッセル、トルストイ、クロボトキンをはじめとする新思想の紹介を積極的に行い民衆の啓蒙に務めることとなった。マルクス主義はこれら新思想のひとつとして紹介され、以降活字媒体を通して朝鮮に広く行きわたることになるが、その際、マルクス主義を積極的に紹介したのが共産主義グループに所属している社会主義者であった。まずは朝鮮内<sup>(7)</sup>における共産主義グループ結成に関して概観しておこう。

朝鮮内で最初に結成された共産主義グループは、資料上では1919年10月に京城で結成されたソウル共産団体だといわれている<sup>(8)</sup>。以降、朝鮮内ではいくつかの共産主義グループが相次いで結成さ

(6) 管見の限りでは、1920年5月8日付『東亜日報』に掲載された솔씨（金明植の筆名）の「생각나는대로」（思いつくままに）で、朝鮮の活字媒体において唯物史観という用語が初めて登場した。それ以前では、マルクス主義関連の記事は見あたらない。

(7) ここで「朝鮮内」という用語を使用したのは、朝鮮人社会主義運動は、朝鮮半島内に先駆けてまず中国、ロシアなどに亡命した朝鮮人社会主義者によってはじまったからである。亡命地域における朝鮮人社会主義運動の発生に関しては、イム・キョンソクの前掲書が最もまとまった研究である。日本語論文としては、劉孝鐘「極東ロシアにおける10月革命と朝鮮人社会」『ロシア史研究』47, 1987；同「国民会とコミンテルン」『青丘学術論集』18, 2001 などがある。なお、本稿で使用している「朝鮮」という用語は、すべて「朝鮮半島内」を意味しており、朝鮮半島外で展開された朝鮮人社会主義運動と区別する必要がある場合のみ「朝鮮内」という用語を使用している。

(8) ソウル共産団体は1921年5月、イルクーツク派高麗共産党創立大会に代表を派遣し、イルクーツク派高麗共産党の国内組織基盤になったといわれているが（イム・キョンソク、前掲書、117-119頁）、この団体の実態に関してはほとんど明らかになっておらず、当時の活字媒体にソウル共産団体の誰が、どのような記事を寄稿していたのかも明らかでないため、本稿では分析の対象外とした。

れるが、とりわけマルクス主義の普及において重要な役割を果たしたのは金若水サークル、朝鮮共産党、社会革命党であった。

金若水サークルは、朝鮮最初の労働団体である朝鮮労働共済会内部に、1920年5月、金若水や鄭泰信らを中心とする7名で組織された、マルクス主義を含めた新思想の学習サークルであった（この団体には正式名称がなかったため、本稿では、便宜上この団体を金若水サークルと呼称している）。1921年春、金若水サークルの主力である金若水と鄭泰信は活動拠点を日本に移し、当時、思想的に急進化しつつあった在日朝鮮人留学生らとともに大衆時報社を設立し、月刊雑誌『大衆時報』を創刊した。これは、朝鮮人社会主義者が日本で発行した最初の雑誌であり、日本における朝鮮人社会主義運動の出発点であった。また、この時期、金若水と鄭泰信はコスモ倶楽部、暁民会にも参加しており<sup>(9)</sup>、以降、金若水を中心とする在日朝鮮人社会主義勢力は、日本社会主義運動と深い関係を持ちつつ活動を展開していくことになる<sup>(10)</sup>。

朝鮮共産党は1920年3月15日に京城で結成されたものの、結成とほぼ同時に活動が停止した。翌年5月に活動を再開し、1922年にヴェルフネウディンスクで開かれた高麗共産党の党統合大会で（上海派、イルクーツク派との）中立路線を標榜して以降しばしば「中立党」と呼ばれた。1925年に京城で組織される朝鮮共産党とは異なる団体である。この団体には鄭在達、金翰、申佰雨、金思國らが参加しており、1921年9月には朝鮮内で初めて『共産党宣言』を翻訳、秘密配布（85部）したといわれている<sup>(11)</sup>。日訳版からの重訳であったようだが、その実物は確認されていない。

社会革命党<sup>(12)</sup>は、1915年に東京で朝鮮、中国、台湾らの留学生の連帯を目的に組織された新亜同盟党<sup>(13)</sup>を母体として、1920年6月に京城で結成された。金明植、金鏹洙、兪鎮熙、尹滋瑛、李増林、朱鍾建ら社会主義者の他、新自由主義的社会政策を主張していた張徳秀、崔八鏞など後に社会主義陣営から離脱していく活動家も参加しており、結成当初は、独立運動のための新たな理論を、

---

(9) コスモ倶楽部、暁民会と朝鮮人社会主義者に関しては、松尾尊允「コスモ倶楽部小史」『京都橘女子大学研究紀要』26、2000；高津正道「暁民会前後の思い出」『労働運動史研究』12、1958 参照。

(10) 金若水サークルの活動や思想的傾向、及び日本における朝鮮人社会主義勢力の形成過程に関しては、拙稿「金若水の渡日と『大衆時報』創刊—日本における朝鮮人社会主義勢力の形成に関する一考察—」『在日朝鮮人史研究』38、2008 を参照されたい。

(11) 朝鮮共産党に関する記述は、パク・チョラ、前掲博士学位論文、2003 による。

(12) 以下、社会革命党に関する記述はとくに注記しない限り、최선웅「1920년대 초 한국공산주의운동의 탈자유주의화 과정—상해파 고려공산당 국내지부를 중심으로—」『韓國史學報』26(チェ・ソヌン「1920年代はじめ韓国共産主義運動の脱自由主義化過程—上海派高麗共産党国内支部を中心に—」『韓國史學報』26)、2007 による。

(13) 新亜同盟党は中国においては、陳独秀らの上海共産主義グループを相手に、コミンテルンの「正統」共産党の座を争った大同党の母体となった。また、大同党の黄介民、桃作賓らは上海派高麗共産党の社会主義者らと密接な係わりをもっていた（大同党に関しては、石川禎浩、前掲書、第二章第三節参照）。金鏹洙は、社会革命党が上海派高麗共産党の国内支部に転換する際、上海において大同党の援助を受けたことを回顧しており（한국정신문화연구원 현대사연구소 편『遲耘 金鏹洙』한국정신문화연구원(韓國精神文化研究院現代史研究所編『遲耘 金鏹洙』韓國精神文化研究院、1999、8頁)、新亜同盟党結成以来の中朝社会主義者の関係が続いていたことがうかがわれる。



社会主義を含めて幅広く模索する秘密読書会であった。しかし1921年に入ると、読書会として結成された社会革命党の位相に決定的な変化が訪れる。1921年4月、社会革命党は上海に9名の代表を派遣し、1921年5月の高麗共産党創党大会において、社会革命党は上海派高麗共産党の国内支部へと転換した。国内支部は当時、共産主義グループ間において最大の勢力を有していたものの、張徳秀ら新自由主義<sup>(14)</sup>分子の存在により、以降、朝鮮共産党や在日朝鮮人社会主義勢力からの批判にさらされることになる<sup>(15)</sup>。

以上概観したように、1920年に結成された共産主義グループは、いずれも1921年を境に活動が活発化したといえる。そして、こうした活動の変化に歩調を合わせるかのように、朝鮮におけるマルクス主義学説の紹介も、1920年から1921年にかけて、量的質的に大きく変化していく。

## 2 1920年、新思想・新理論の模索

三・一運動以降、朝鮮の独立運動家や知識人は、活字媒体を活用して新思想の紹介を積極的に行ったが、マルクス主義に限らず、西洋近代思想一般の紹介においても、日本書が占める比重は極めて大きかった。例えば、雑誌『開闢』では1920年6月の創刊以来、毎号にわたって、ニーチェ、ルソーをはじめとする西洋近代思想が紹介されたが、それらの大半は中澤臨川・生田長江編『近代思想十六講』と生田長江・本間久雄共著『社会改造の八大思想家』を翻訳したものであった<sup>(16)</sup>。また、当時日本で流行していたラッセルの『社会改造の原理』は朝鮮でも『東亜日報』などで訳載されたが、それは松本悟朗訳からの重訳であった<sup>(17)</sup>。それでは、1920年当時、朝鮮社会主義者は具体的にどのような文献を参照し、どのような文章を書いていたのだろうか。表1は、1920年に社会

(14) 当時の張徳秀らの新自由主義的な主張は、L.T.ホブハウスのそれに類似しているといわれる。

(15) この問題に関しては、チェ・ソヌン、前掲論文、305-313頁；임경석「운양 김윤식의 죽음을 대하는 두 개의 시각」『역사와 현실』57(임・키ョン송「雲養金允植の死に対する二つの視角」『歴史と現実』57)、2005；박종린「『김윤식사회장』 찬반논의와 사회주의세력의 재편」『역사와 현실』38(박・チョン린「金允植社会葬」賛反論議と社会主義勢力の再編」『歴史と現実』38)、2000などが詳しい。

(16) 허수「1920년대 초 『개벽』 주도층의 근대사상 소개양상 -형태적 분석을 중심으로-」『역사와 현실』67(ホ・ス「1920年代はじめ『開闢』主導層の近代思想紹介様相 -形態的分析を中心に-」『歴史と現実』67)、2008。

(17) 류시현「식민지시기 러셀의 『사회개조의 원리』의 번역과 수용」『韓國史學報』22(リュ・シヒョン「植民地時期ラッセルの『社会改造の原理』の翻訳と受容」『韓國史學報』22)、2006。

(18) 本稿で分析した1920年の活字媒体は、朝鮮労働共済会の機関誌『共済』、日刊紙の『東亜日報』と『朝鮮日報』、総合雑誌の『開闢』、『서울』(ソウル)の5誌である。ただし、朝鮮社会主義者が主に活用していた媒体は『共済』と『東亜日報』であるため、それ以外の媒体に朝鮮社会主義者はあまり文章を寄稿していない。これらの媒体に朝鮮社会主義者が発表した記事の中から、随筆や詩、文藝に関する記事を取り除くと、管見の限りでは全体で25本程度であり(新聞紙上で何回かに分けて連載された記事に関しては、1本で計算している)、そのうち18本程度が社会主義・労働問題に関する記事である。この表は、その中から日本書を翻訳、乃至引用した記事を発表時期順に配列したものである。なお、▲印のある記事は翻訳や引用ではなく、底本を参照して書かれたもの(内容が酷似したもの)である。

主義者が執筆した記事と、その典拠をまとめたものである。

表1 1920年社会主義者執筆記事と翻訳及び引用底本対照表<sup>(18)</sup>

| 筆者・記事名・掲載媒体                                       | 翻訳及び引用底本                                    | 掲載媒体と引用頁                                                    |
|---------------------------------------------------|---------------------------------------------|-------------------------------------------------------------|
| 俞鎮熙「労働者の指導와 教育」『東亜日報』, 1920. 5. 1-5. 2            | ①福田徳三「自治, 自主を主とし, 無用の干渉を絶念せよ」 ②安部磯雄「労働者の教育」 | ①『解放』第一巻第二号, 1919. 7, 70-72 頁 ②『解放』第一巻第二号, 1919. 7, 83-86 頁 |
| 俞鎮熙「世界労働運動의 方向」(世界労働運動の方向)『東亜日報』, 1920. 5. 5-5. 8 | ①佐々弘雄「解放と先駆者」 ② 麻生久「世界労働運動の方向」              | ①『解放』第一巻第二号, 1919. 7, 48 頁 ②『解放』第一巻第三号, 1919. 8, 133-139 頁  |
| 金明植(金明植)「青年에게 告함」(青年に告ぐ)『東亜日報』, 1920. 5. 22       | クロボトキン著 大杉栄訳「青年に訴ふ」                         | 『労働運動(第一次)』5, 1920. 4. 30, 7 面                              |
| 金明植「労働問題는 社会의 根本問題이라」『共済』1, 1920. 9 ▲             | 大山郁夫「労働問題と教育問題との交錯」                         | 『我等』第二巻第一号, 1920. 1, 8-12 頁                                 |
| 無我生(俞鎮熙)「労働者の文明은 如斯하다」(労働者の文明はこうだ)『共済』1, 1920. 9  | 賀川豊彦「労働者崇拜論」                                | 『解放』第一巻第三号, 1919. 8, 56-67 頁                                |
| 霽観(金翰)「朝鮮労働者諸君에게 檄을 送하노라」『共済』1, 1920. 9 ▲         | ①佐野学「労働者の指導倫理」 ② 木村久一「文芸の解放」                | ①『解放』第一巻第三号, 1919. 8, 78-79 頁 ②『解放』第一巻第二号, 1919. 7, 33-35 頁 |
| 又影生(鄭泰信)「막쓰와 唯物史觀의 一瞥」『開闢』3, 1920. 8              | 堺利彦「唯物史観概要」                                 | 『社会主義研究』第一巻第一号, 1919. 4, 11-14 頁                            |
| 俞鎮熙「労働運動의 社会主義的 考察」『共済』2, 1920. 10                | 〈表2〉にて記載                                    |                                                             |

まず、表1の「掲載媒体と引用頁」に記載されている文献の具体的な入手方法から検討しよう。資料的な手がかりはほとんど残されていないのだが、主に朝鮮の書店で購入したケースと、朝鮮と日本を往来していた在日朝鮮人留学生や活動家によってもたらされたケースの2種類であったと考えられる。まずは前者のケースであるが、1920年当時、朝鮮で朝鮮共産党の金翰と共に社会主義を学習していた柳子明の回顧録には次のような記述がある。

そのとき、日本では共産主義と無政府主義が公開して、宣伝されていた。山川均、堺利彦(堺利彦 - 引用者)、河上肇などは有名な共産主義者で、大杉栄は有名な無政府主義者だった。彼らは新しく出版される『改造』雑誌と『解放』雑誌に共産主義と無政府主義に対する文章をいつも発表してきた。また、『批評』雑誌には長谷川如是閑と大山郁夫が西洋各国の社会主義の発展に関する文章を発表していた。先に述べた三つの雑誌はソウルにある日本の書店でも買うことができたので、私たちは毎月それらの雑誌を買って社会主義を研究した<sup>(19)</sup>。

(19) 유자명『유자명 수기 한 혁명자의 회억록』독립기념관 한국독립운동사 연구소(柳子明『柳子明手記 ある革命者の回憶録』独立記念館韓国独立運動史研究所), 1999, 69-70 頁。

柳子明が回顧している「長谷川如是閑と大山郁夫」の『批評』は、大山らの個人雑誌『我等』の間違いであろう。室伏高信の主幹による『批評』という雑誌も当時発行されていたが、この雑誌に大山や長谷川は文章を発表していない。表1に記載されている『解放』や『我等』などは、朝鮮社会主義者が「ソウルにある日本の書店」で購入したものなのかもしれない。

後者のケースであるが、1924年の資料には、朝鮮において社会主義は「日本留学生の中の新進思想家」によって流入した「日本社会主義文書及び日本語文の思想書類」を通じて輸入されたという記述がある<sup>(20)</sup>。それらの具体的な書籍名は不明であるが、例えば、李増林は社会革命党の結成当初からのメンバーであると同時に、早稲田大学の留学生であり、韓人社会党の李東輝によってコミンテルンの密使として日本に派遣され、大杉栄や近藤栄蔵と接触した人物でもあった。後日、李増林は官憲の取調べに対して、河上肇の『社会問題研究』、堺利彦・山川均主筆の『社会主義研究』、『労働運動』などを購読していたと述べている<sup>(21)</sup>。いずれも、1920年頃の代表的な日本の社会主義文献であるが、実際に表1には、『社会主義研究』と『労働運動（第一次）』が一件ずつ記載されている。おそらく、李増林のような人物が、任務や留学などで朝鮮と日本を往来する傍ら、日本の社会主義文献などを持ち帰ったのであろう。

しかし、1920年当時から『社会主義研究』などのマルクス主義を専門的に扱う文献が朝鮮に流入していたからといって、この時期から朝鮮の活字媒体でマルクス主義が本格的に紹介されはじめたわけではなかった。表1の「翻訳及び引用底本」に堺利彦らマルクス主義者が執筆した論文が一部しか含まれていないことから察せられるが、1920年に朝鮮社会主義者が活字媒体でマルクス主義を紹介、論じたものはごくわずかで、鄭泰信の「마르크스와 唯物史觀의 一瞥」（マルクスと唯物史観の一瞥）と、後述する兪鎮熙の「労働運動의 社会主義的 考察」（労働運動の社会主義的考察）程度しか確認できない。4節で論じるが、朝鮮で活字媒体におけるマルクス主義学説の紹介が本格的に開始されたのは、1921年に入ってからであった。『経済学批判』序文が、朝鮮内<sup>(22)</sup>の合法活字媒体最初のマルクス主義原典として、1921年の3月（尹滋瑛）と4月（申佰雨）に二度も翻訳されたこと<sup>(23)</sup>などは、その端的な例であろう。

表1に記載したように、鄭泰信の「マルクスと唯物史観の一瞥」は、堺利彦「唯物史観概要」の一部を翻訳したものである。実は、1921年に尹滋瑛と申佰雨が翻訳した『経済学批判』序文の底本も堺利彦「唯物史観概要」であった。「唯物史観概要」は9節から成り、1節から4節、6節から9節までが唯物史観に関する解説であり、5節が『経済学批判』序文に該当する。尹滋瑛が5節のみ、申佰雨が「唯物史観概要」を完訳したのに対して、鄭泰信の「マルクスと唯物史観の一瞥」は

(20) 「癸亥와 甲子」『開闢』43, 1924, 3-4頁。

(21) 山泉進「大杉栄、コミンテルンに遭遇すー（付）李増林聴取書・松本愛敬関係史料」『初期社会主義研究』15, 2002, 115頁。

(22) 上海臨時政府発行の『独立新聞』では、1920年に『経済学批判』序文が掲載された。孫斗煥「社会主義研究（一）～（五）」『独立新聞』, 1920.5.29-6.17は河上肇『近世経済思想史論』岩波書店, 1920, 76-116頁（頁数は『河上肇全集』10, 岩波書店, 1982）を抄訳したものであるが、1920年6月5日付「社会主義研究（三）」で『経済学批判』序文の朝鮮語訳が掲載された。もちろん河上肇からの重訳である。

(23) 尹滋瑛「唯物史観要領記」『我聲』1, 1921.3；申佰雨「唯物史観概要」『共済』7, 1921.4。

1 節から 4 節だけを翻訳したものであった。1921年に二度も訳載される『経済学批判』序文を、鄭泰信を含めた朝鮮社会主義者はその前年には翻訳しなかったのである。このことから明らかなように、朝鮮社会主義者は活字媒体を通じたマルクス主義学説紹介に対して、1921年に比べ、1920年の時点ではあまり積極的ではなかった。

その主な要因は、1920年当時の共産主義グループの性格と関連していると思われる。先に述べたように、金若水サークルや社会革命党は新思想を幅広く研究、模索するサークルや読書会であり、マルクス主義だけを専門的に研究する団体ではなかった（活動を停止していた朝鮮共産党の実態は不明）。そして実際に、こうした共産主義グループの性格を反映して、そこに所属している社会主義者もマルクス主義だけでなく様々な思想や理論に注目しており、当時から彼らの理論的指針がマルクス主義で固定されていたわけではなかった。

表 1 の記事名を見れば分かるように、当時、朝鮮社会主義者は労働問題を集中的に論じていたが、その労働問題の解決策は様々であった。例えば、社会革命党金明植の「労働問題는 社会의 根本問題이라」(労働問題は社会の根本問題なり)は、大山郁夫が『我等』で主張していた民衆文化主義に関する論文を参照し、労働問題の発生原因を「文化価値」と「物質価値」という文化主義的観点から考察したものであった。同じ社会革命党に所属していた兪鎮熙の「労働者の 指導와 教育」(労働者の指導と教育)は、福田徳三や安部磯雄の文章を引用して、社会政策の導入を通じた労働問題解決を主張したものである。朝鮮共産党の金翰は「朝鮮労働者諸君에게 檄을 送하노라」(朝鮮労働者諸君に檄を送ろう)で、主に佐野学の論文を参照して、ラッセルの「創造の衝動」説を根拠に労働神聖を論じている。また、翻訳や引用の形跡が見られなかったため表 1 には掲載しなかったが、金若水サークルの金若水は「戦後世界大勢 와 朝鮮労働問題」(戦後世界大勢と朝鮮労働問題)で、ロシア革命の波及を恐れた国際資本主義による改良主義的な懐柔策として開かれた国際労働会議<sup>(24)</sup>を、「社会的公正に基礎した理想的新文明を建設」するための「最初の舞台」であると高く評価し、労資協調による労働問題の解決を主張していた。

以上見てきたように、当時言論活動を行っていた社会主義者は、ラッセル、文化主義、社会政策など様々な理論、思想に関心をよせており、彼らの理論的指針が当初からマルクス主義に固定されていたわけでは決してなかった。表 1 を見れば分かるように、この時期に社会主義者が執筆した記事には、『解放』に依拠したものが多い。マルクス主義を専門的に扱う堺利彦・山川均主筆の『社会主義研究』ではなくて、『解放』から多くが引用、参照されたのは、その総合雑誌という特徴ゆえに、マルクス主義だけでなく当時の日本での流行思想が幅広く論じられていたからであろう。

1921年に入り共産主義グループの活動が活発化すると、翻訳、引用の底本は一新されることになる。しかしその前に、1920年に他の社会主義者に先駆けて活字媒体でマルクス主義に立脚した労働運動の展開を主張した社会主義者、兪鎮熙のマルクス主義受容について触れておきたい。

---

(24) 住谷悦治/山口光朔/小山仁示/浅田光輝/小山弘健編『大正デモクラシーの思想』芳賀書店、1967、251 頁。

### 3 兪鎮熙のマルクス主義受容

1920年に入り言論活動を開始した社会革命党の兪鎮熙は、当初は福田徳三、安部磯雄、麻生久などの論文を抄訳し、社会政策や各国労働運動の動向を紹介していた（表1）。兪鎮熙が活字媒体を通じてマルクス主義を主張しはじめるのは、1920年10月の『共済』2号に掲載された「労働運動の社会主義的考察」からであった。これは、朝鮮の活字媒体で初めてマルクス主義を主張した記事であるという点で注目に値する。

この記事で兪鎮熙は、精神改造を「精神生活が旧式の唯心論の考案のように、外界の刺激とは何ら関係がなく、すべて内部的決定によるものだという説はほぼ妄言である」と批判し、「物質的方面を重視」するべきであると主張した。その主張の根拠とは、「生産方法の如何は社会経済的構造を決定し、その経済的關係はすなわち人類の社会的精神的生活を決定するものであるから、したがって社会はこの生産力の発展によって改革」されるためであった<sup>(25)</sup>。兪鎮熙にとって唯物史観とは、物的改造の重要性を主張する論拠であった。

兪鎮熙のマルクス主義に対する関心は唯物史観にとどまらなかった。労働運動の目的や方法に関しても兪鎮熙はマルクス主義に立脚して論じている。例えば、兪鎮熙は「生産方法の革命を目的にした労働運動を実行するべき」と主張したが、これは労働運動が発生した原因を生産手段の有無という観点で把握したからであった<sup>(26)</sup>。また、労働運動の方法に関してはカウツキーの見解を引用し、職業が異なる労働組合を、マルクス主義を通して統合するべきと主張した<sup>(27)</sup>。

従来、「労働運動の社会主義的考察」は兪鎮熙自身が執筆したものと理解されてきたが、実際は大半が日本書を引用したものであった。この記事は6節から構成されているが、小見出し別に引用底本をまとめたものが表2である。

表2 兪鎮熙「労働運動의 社会主義的考察」小見出し別引用底本対照表

| 小見出し名                                      | 引用底本                                      | 掲載媒体                                                                      |
|--------------------------------------------|-------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
| 1 節. 人權回復運動                                | ①山川菊栄「何故の労働運動か」<br>②北澤新次郎「労働問題の核心」        | ①『解放』第一巻第二号, 74-75 頁 ②『解放』第一巻第二号, 74-78 頁                                 |
| 2 節. 文化運動에서 労働運動으로 (文化運動より労働運動へ)           | ①中澤臨川「労働問題の愛護」 ②加藤一夫「文化運動と労働運動」           | ①『中央公論』臨時増刊労働問題号, 19 19. 7, 2-3, 8-9 頁 ②『中央公論』臨時増刊労働問題号, 1919. 7, 70-72 頁 |
| 3 節. 労働運動과 社会主義의 統合을 望한다 (労働運動と社会主義の統合を望む) | カウツキー著 櫛田民蔵訳「文化史上のマルクス (4) 労働運動と社会主義との統合」 | 『我等』第二巻第三号, 1920. 3, 118-122 頁                                            |
| 4 節. 労働問題에 内外의 別이 없다 (労働問題に内外の別はない)        | 堀江帰一「労働問題講和」                              | 『中央公論』臨時増刊労働問題号, 1919. 7, 17-23 頁                                         |
| 5 節. 時期는 切迫하다 (時期は切迫している)                  | 加藤一夫「文化運動と労働運動」                           | 『中央公論』臨時増刊労働問題号, 1919. 7, 74 頁                                            |
| 6 節. 直正한 先驅者를 想하면서 (直正な先驅者を想いながら)          | 佐々弘雄「解放と先驅者」                              | 『解放』第一巻第二号, 1919. 7, 47-49 頁                                              |



表2から分かるように、兪鎮熙の「労働運動の社会主義的考察」は、総合雑誌の『中央公論』、『解放』のほか、兪鎮熙と同じ社会革命党所属の金明植が当時参照していた大山郁夫らの雑誌『我等』からの引用によって構成されていた。「労働運動の社会主義的考察」の2節である「文化運動에서労働運動으로」（文化運動から労働運動へ）は、兪鎮熙がマルクス主義的観点で労働問題を考察し、唯物史観を根拠に物的改造を主張しているという点で、この記事の核心だといえる。だが、この2節は大部分がマルクス主義者とはいえない中澤臨川と加藤一夫の論文を引用したものであった。まずは、兪鎮熙が中澤論文と加藤論文の中から、どこを、どのように引用したのかを見ていこう。

中澤臨川「労働問題の愛護」は、基本的には文化主義に立脚した労働運動の展開を主張した内容だといえる。精神運動を重視する文化主義者の中澤にとって、人間の内的意識の要素を認めないマルクスの唯物史観は、労働運動を「ドライ」にする「inhuman」な理論に過ぎなかった<sup>(25)</sup>。しかし、その一方で中澤は、マルクスの資本主義批判の意義に関しては認めていた。中澤が、労働運動の発生原因を生産手段の有無という観点で考察した箇所が、兪鎮熙によってそのまま引用された<sup>(26)</sup>。

次に、加藤一夫「文化運動と労働運動」からの引用を見ていこう。この論文は文化主義に対する問題提起として書かれたものである<sup>(27)</sup>。この論文で加藤は、文化主義に立脚した労働運動の意義を認めたくて、精神運動を重視する文化主義者に唯物史観を提示することで彼らに物的改造を重要視させ、文化主義的労働運動を「生産方法の革命を目的とする労働運動」に発展させることに重点を置いている<sup>(28)</sup>。しかし、留意すべきは、加藤が唯物史観を全面的に肯定したわけではなかったという点である。加藤によれば、人間の「自分自身を自由に生き自由に展びようとする或る不可抗の力」、すなわち人間の内的意識の要素を認めない点が、「唯物史観の欠点」でもあった<sup>(29)</sup>。

要するに加藤は、精神的改造を重視する文化主義を、唯物史観説を援用することで物的改造を重視する労働運動へ修正しようとしたが、精神的改造も堅持していたため唯物史観を全面的には肯定しなかった、といえる。

兪鎮熙が唯物史観を根拠に物的改造を主張した箇所は、すべて加藤論文を引用したものである<sup>(30)</sup>。したがって、兪鎮熙が参照した唯物史観説とは、加藤によって解釈された、物的改造を重要視する根拠としての意義を持つとともに、人間の内的意識を認めないという「欠点」を持つ唯物史観説で

---

(25) 兪鎮熙「労働運動의 社会主義的考察」『共済』2, 1920. 10, 14頁。

(26) 兪鎮熙, 前掲記事, 12-13頁。

(27) 兪鎮熙, 前掲記事, 16頁。

(28) 中澤臨川「労働問題の愛護」『中央公論』臨時増刊労働問題号, 1919. 7, 4頁。

(29) 中澤臨川, 前掲記事, 8-9頁；兪鎮熙, 前掲記事, 12-13頁。

(30) 加藤一夫「文化運動と労働運動」『中央公論』臨時増刊労働問題号, 1919. 7。論文の構成は、1節「序言」、2節「文化主義」、3節「文化主義の主張と其の結論」、4節「文化運動より労働運動へ」、5節「唯物史観」、6節「時期は切迫している」。兪鎮熙, 前掲記事の2節と5節の小見出しは加藤論文の2節と4節を訳したものである。

(31) 加藤一夫, 前掲記事, 70-72頁。

(32) 加藤一夫, 前掲記事, 74頁。

(33) 加藤一夫, 前掲記事, 71頁；兪鎮熙, 前掲記事, 13-14頁。

あった。しかし兪鎮熙は、加藤が唯物史観に対して否定的に評価した箇所に関してはほとんど引用していない。兪鎮熙は加藤の唯物史観説をそのまま受け入れたわけではなく、加藤が主張する二つの要素を持つ唯物史観説のうち、前者の要素のみを重視したのである。これは兪鎮熙と加藤の物的改造に対するスタンスの違いに起因している。兪鎮熙は加藤の論文を引用する際、一箇所だけ原文を修正して自身の見解を付け加えている。具体的に原文と修正された箇所を比較してみよう。加藤は物心両面の改造を重視する立場（物的改造にウェートを置いてはいるが）から、文化主義者と社会主義者に対して次のように批判している。

自分は今日の多くの社会主義者の様に、精神的方面を全然無視して、偏に物質的改善にのみ依らうとする事の余りに偏頗なる事を思ふものであるが、それと同時に又物質的方面を全然閑却して偏に精神運動や文化運動にのみ頼らうとする事の更に更に偏頗なるを思ふのである<sup>(34)</sup>。

一方、兪鎮熙は次のように原文を修正している。

もちろん、精神的方面を全然無視するものではないが、解決の要点は偏頗すべく物質的方面を重視することにあるといえる<sup>(35)</sup>。

上の引用文から、兪鎮熙と加藤のスタンスの違いが読み取れるだろう。物的改造を重視すべきという主張は兪鎮熙も加藤も同じである。しかし、加藤が「偏に物質的改善にのみ依らうとする事」を認めず、精神的改造も堅持しているのに対し、兪鎮熙は「偏頗すべく物質的方面を重視」すべきだと主張している。つまり、兪鎮熙は物心両面の改造は朝鮮における労働問題の解決策としては不徹底だと考えたのであり、人間の内的意識の要素を認めない「唯物史観の欠点」は、必ずしも「欠点」として映ったわけではなかったのである。

以上見てきたように、朝鮮の活字媒体で初めてマルクス主義に立脚した労働運動の展開を主張した記事である「労働運動の社会主義的考察」は、加藤と中澤の論文の中からマルクス主義に関して肯定的に評価した箇所のみを抽出し、それをカウツキー論文と繋ぎ合わせることでマルクス主義的な論文として再構成したものだ。

ところで、加藤論文が掲載された『中央公論』臨時増刊労働問題号には、山川均が唯物史観に関して論じた「マルクスとマルクス主義」<sup>(36)</sup>という論文も掲載されている。そして、同記事と同じ

(34) 加藤一夫，前掲記事，72 頁。

(35) 兪鎮熙，前掲記事，14 頁。

(36) 山川均は資本主義社会の崩壊と社会主義の必然的な到来を無産者が自ら意識することを革命運動のひとつの要素として重視し、「マルクスの唯物史観説は、人間の精神的要素を除外しては却って成立し得ないものである」と主張していた（山川均「マルクスとマルクス主義」『中央公論』臨時増刊労働問題号，1919.7，47 頁）。

時期に書かれ、類似した唯物史観解釈が見られる「無産階級の歴史的使命」<sup>(37)</sup>は1922年に雑誌『新生活』で記載された<sup>(38)</sup>。山川均の唯物史観解釈は、1923年の物産奨励論争の際には、資本主義的發展が微弱な朝鮮で社会革命を主張する議論の根拠とされる<sup>(39)</sup>。にもかかわらず、なぜ兪鎮熙は自身の理論的指針として、マルクス主義者山川均ではなく、加藤一夫の唯物史観説を受容したのだろうか。

前述したように、金明植は大山郁夫の当時の論説を参照して、労働問題の発生原因を文化主義的観点から考察していたが、それが示すように、文化主義は朝鮮思想界に影響を与えた思想のひとつであった。とくに桑木厳翼や左右田喜一郎が提唱した文化主義は雑誌でも紹介され、李敦化などの民族主義系列知識人に多大な影響を与えていた<sup>(40)</sup>。文化主義が日本から流入した思想である以上、文化主義に対する問題提起として書かれた加藤論文は、日本と同様に朝鮮でも文化主義者に物的改造の必要性を認識させる効果を持つ。こうした判断が、兪鎮熙が加藤一夫の唯物史観説を受容した主な要因ではないかと思われる。そうであれば、このことは同時に、日本での文化主義をめぐる論争が、朝鮮に場を移してそのまま展開されていたことを意味する。外来思想を実際に朝鮮社会に適用していく前の段階、すなわち新思想・新理論の受容・選別の段階において、日本から流入した「知」がいかに大きな比重を占めていたかを、兪鎮熙のマルクス主義受容は示しているといえよう。

#### 4 1921年、本格的マルクス主義伝播——マルクス主義とボリシェヴィズムの同時紹介

1921年に入り共産主義グループの活動が本格化するとともに、朝鮮の活字媒体で本格的なマルクス主義学説紹介がはじまった。金若水サークルの金若水、鄭泰信らが日本に移動したため、朝鮮内では主に、上海派高麗共産党国内支部（以下、国内支部）と1921年5月に活動を再開した朝鮮共産党所属の社会主義者によって、マルクス主義が本格的に紹介された<sup>(41)</sup>。朝鮮の活字媒体で初めて記載されたマルクス主義原典『経済学批判』序文も、国内支部の尹滋瑛と朝鮮共産党の申佰雨の翻訳によるものであった。次の表3は1921年に社会主義者が執筆した記事と、その典拠をまとめたものである。

---

(37) 山川均「無産階級の歴史的使命」。1919年8月13日に脱稿されたが、初出の雑誌は不明。山川均『歴史を創造する力』三徳社、1922に収録された。

(38) 鄭栢 訳「無産階級の歴史的使命」『新生活』9, 1922.9.

(39) パク・チョンリン, 前掲博士論文, 2007, 42-84頁.

(40) 文化主義が朝鮮思想界に与えた影響に関しては, 박찬승『한국근대정치사상사연구』역사비평사(パク・チャンスン『韓国近代政治思想史研究』歴史批評社), 1992, 176~185頁; 허수『일제하李敦化의 사회사상과 天道教 - '宗教的 啓蒙'을 중심으로-』(ホ・ス『日帝下李敦化の社会思想と天道教 - '宗教的 啓蒙'を中心に』)ソウル大学校博士学位論文, 2005, 57~75頁が詳しい。

(41) 金若水や鄭泰信らが1921年に日本で行った社会主義学説の紹介に関しては, 前掲の拙稿「金若水の渡日と『大衆時報』創刊—日本における朝鮮人社会主義勢力の形成に関する一考察—」を参照されたい。

表3 1921年社会主義者執筆記事と翻訳及び引用底本対照表<sup>(42)</sup>

| 筆者・論文名・掲載媒体                                                  | 翻訳及び引用底本                             | 掲載媒体と引用頁                                                                      |
|--------------------------------------------------------------|--------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| 尹滋瑛「唯物史観要領記」『我聲』1, 1921.3                                    | 堺利彦「唯物史観概要」                          | 『社会主義研究』第一巻第一号, 1919.4, 14-16頁                                                |
| 申佑雨「唯物史観概要」『共済』7, 1921.4                                     | 堺利彦「唯物史観概要」                          | 『社会主義研究』第一巻第一号, 1919.4, 11-19頁                                                |
| 無我生訳「青年에게 訴함」(青年に訴ふ)『共済』7, 1921.4                            | クロボトキン著 大杉栄訳「青年に訴ふ・一, 一の二」           | 『労働運動(第二次)』第一号, 1921.1, 8面; 第二号, 1921.1, 1921.2, 6面                           |
| 金明植「니콜라이 레닌은 잊디한 사람인가」(ニコライ・レーニンはどうな人か)『東亜日報』, 1921.6.3-8.31 | ①山川均「レーニンの生涯と事業」 ②内山省三『世界革命史論』       | ①『社会主義研究』第三巻第四号, 1921.4, 完訳 ②内山省三『世界革命史論』, 江原書店, 1919.5, 312-443頁             |
| 無我生「労働問題의 要諦」(労働問題の要諦)『共済』8, 1921.6                          | ①筆者未詳「労働問題の要諦」 ②中澤臨川「労働問題の愛護」        | ①『中央公論』臨時増刊労働問題号, 1919.7, 1頁 ②『中央公論』臨時増刊労働問題号, 1919.7, 9-16頁                  |
| 一記者「労働問題通俗講話」『共済』8, 1921.6                                   | 堀江帰一「労働問題講話」                         | 『中央公論』臨時増刊労働問題号, 1919.7, 17-25頁                                               |
| 高順欽「마원說과 맑스說」(ダーウィーン説とマルクス説)『共済』8, 1921.6                    | 堺利彦「マルクス説とダーウィーン説」                   | 『社会主義研究』第一巻第一号, 1919.4, 1-8頁                                                  |
| 無我(兪鎮熙)訳「青年에게 訴함」『共済』8, 1921.6                               | クロボトキン著 大杉栄訳「青年に訴ふ・二の一, 二の二, 三ノ一, 四」 | 『労働運動(第二次)』第三号, 1921.1, 6面; 第四号, 1921.2, 6面; 第五号, 1921.3, 6面; 第七号, 1921.3, 6面 |
| 尹滋瑛「相互扶助論」『我聲』3, 1921.7                                      | 大杉栄「クロボトキンの生物学相互扶助論」                 | 大杉栄『クロボトキン研究』, アルス, 1920.10, 64-75頁                                           |
| 尹滋瑛「相互扶助論」『我聲』4, 1921.9                                      | 大杉栄「クロボトキンの生物学相互扶助論」※推定              | 大杉栄『クロボトキン研究』, アルス, 1920.10, 75-86頁                                           |
| 高順欽「마원說과 맑스說(続)」『共済』9, 未発行                                   | 堺利彦「マルクス説とダーウィーン説」※推定                | 『社会主義研究』第一巻第一号, 1919.4                                                        |
| 筆者未詳「唯物史観에 대한 諸批評」(唯物史観に対する諸批評)『共済』9, 未発行                    | 堺利彦「唯物史観に対する諸批評」※推定                  | 『社会主義研究』第一巻第二号, 1919.6                                                        |

表3から、マルクス主義紹介記事が1921年に入り量的に増加するとともに、その翻訳や引用の底本が、『解放』をはじめとする総合雑誌から『社会主義研究』に変わったことが分かるだろう。1920年のマルクス主義関連記事が、堺利彦「唯物史観概要」の部分訳や、加藤一夫の唯物史観説に依拠したものであったことを想起すれば、マルクス主義学説の紹介水準は、1921年に入り飛躍的に向上したといつてよい。

国内支部の場合、コミンテルンや高麗共産党を介して、ロシアなどで発行されたマルクス主義やボリシェヴィズムに関する文献を入手することが可能だったと推測される。しかし、表3を見れば分かるように、日本書を翻訳、引用した記事は1920年に比べてむしろ増加しており、日本から流入した「知」の占める比重は依然として大きかった。とくに、マルクス主義に関して論じた記事の大

半は『社会主義研究』に掲載された論文を機械的に翻訳、乃至は引用したものであるため、底本と訳文の異同さえもほとんど見られなくなっている。1921年に朝鮮の活字媒体で紹介されたマルクス主義学説は、『社会主義研究』に掲載された堺利彦や山川均のマルクス主義学説そのものであったといっても過言ではないだろう。

そして、『社会主義研究』が朝鮮で果たした役割は、マルクス主義の伝播だけにはとどまらなかった。『東亜日報』で1921年6月から全61回にわたって連載された国内支部所属の金明植「니콜라이 레닌은 었더한 사람인가」(ニコライ・レーニンはどうな人か)は、今日において、朝鮮の活字媒体に掲載された最初のレーニン一代記と評価されており、一般人のレーニンとロシア革命理解に大きな影響を与えた文献として既存の研究でも注目されてきた記事である<sup>(43)</sup>。朝鮮の活字媒体に掲載された最初の本格的ボリシェヴィズム紹介記事であるこの文献も、表3に記載したように、『社会主義研究』1921年4月号に掲載された山川均「レーニンの生涯と事業」の完訳と、内山省三『世界革命史論』の引用によって構成されている。

注目すべきは、金明植が完訳した「レーニンの生涯と事業」は、日本においても「我国に於いて公にせられる最初のレーニン評伝」<sup>(44)</sup>として発表され、『社会主義研究』1921年4月号が東京市内の書店で2、3日の間に売り切れとなるほどの反響を呼んだ文献であったという点である<sup>(45)</sup>。金明植は日本で最新のボリシェヴィズム研究成果をわずか2ヶ月後に朝鮮で伝えはじめ、それが朝鮮でのボリシェヴィズム理解に大きな役割を果たしたのであった。

朝鮮の活字媒体で最初に掲載された本格的ボリシェヴィズム紹介記事が、アメリカやロシアなどの文献ではなく日本の最新研究成果に依拠していたという事実は、朝鮮社会主義者の日本書依存の高さを示すと同時に、日本のマルクス主義・ボリシェヴィズム研究水準が、東アジアにおけるマルクス主義・ボリシェヴィズムの紹介方法に大きな影響を与えていたことも示唆している。

日本では、「冬の時代」を乗り越えた日本社会主義運動の復興を背景に、1919年頃からマルクス

---

(42) この表は、表1と同様に、1921年に社会主義者が活字媒体に発表した記事の中から、日本書を翻訳、乃至引用した記事を発表時期順に配列したものである。分析した活字媒体は、『共済』や『東亜日報』など本稿2節で分析した5誌に、1921年3月に創刊された朝鮮青年連合会の機関誌『我聲』を加えた6誌である。朝鮮社会主義者が1921年にこれらの活字媒体に発表した記事(随筆、詩、文藝は除く)は、管見の限りでは、全体で27本程度であり、そのうち20本程度が社会主義や労働問題に関する記事である。

なお、『共済』9号は、実際には発行されなかったため、9号に掲載予定だった記事は、8号に掲載された「本誌第九号重要内容予告」を参考にした。尹滋瑛「相互扶助論研究」が掲載された『我聲』4号は発行されていたが、影印本では欠落しているため、翻訳底本は推定である。また、筆者が翻訳底本を特定できなかったものに関しては表3に掲載していない。例えば、Y生(兪鎮熙)「労働価値説研究」『共済』7, 1921.4は、朝鮮の活字媒体で最初に紹介されたマルクス主義経済学に関する記事であるが、これも使用している用語などから日本書の引用だと思われる。

(43) 박종린「꺼지지 않은 불꽃, 송산 김명식」『진보평론』2, 1999년 겨울(パク・チョンリン「消えない花火, 松山金明植」『進歩評論』2, 1999年秋), 363頁。

(44) 「四月号予告」『社会主義研究』第三卷第三号, 1921.3, 93頁。

(45) 「編集室より」『社会主義研究』第三卷第五号, 1921.5, 199頁。



主義の宣伝、啓蒙が活発化した。五・四運動時期に中国で展開された日本経由のマルクス主義紹介は、復活した日本の社会主義思潮の中国への横溢であった。しかし、1920年当時、日本のボリシェヴィズム研究水準は高くなかったため、中国では1920年後半からアメリカのボリシェヴィズム文献に依拠したボリシェヴィズム紹介が展開されていった<sup>(46)</sup>。朝鮮では中国に1年ほど遅れて、1921年から活字媒体でボリシェヴィズム紹介がはじまったわけだが、この間に日本でもボリシェヴィズム研究が進展したことにより、朝鮮では日本の成果に依拠してボリシェヴィズムを紹介することが可能になったのである。中国と朝鮮はともに日本経由でマルクス主義が伝播したが、中国ではアメリカの文献に依拠したボリシェヴィズム紹介が展開され、朝鮮では日本の成果に依拠してボリシェヴィズム紹介がはじまった。こうしたボリシェヴィズム紹介の差異を生じさせた背景に、日本のボリシェヴィズム研究水準が関わっていたのは間違いないだろう。

また、ボリシェヴィズム紹介という視点に立てば、1921年に朝鮮の活字媒体で紹介されたマルクス主義学説が『社会主義研究』一色に染まっていた原因も理解できるだろう。本稿2節で論じたように、1920年には活字媒体でマルクス主義がほとんど紹介されなかったため、朝鮮では1921年からマルクス主義とボリシェヴィズムの紹介が、実質的にはほぼ同時にはじまったといえる。社会革命党がコミンテルンの一機関である上海派高麗共産党の国内支部に転換したことからも明らかなように、朝鮮社会主義者にとってボリシェヴィズム紹介は必要不可欠であった。しかし、ボリシェヴィズムを理解するためにはマルクス主義に対する一定の理解が要求され、ボリシェヴィズムを紹介する以上、マルクス主義を紹介する必要が生じる。こうしたマルクス主義とボリシェヴィズムの同時紹介を一挙に可能にする文献が、『社会主義研究』だったのである。『社会主義研究』は1919年の創刊以来、日本でのマルクス主義普及に大きな役割を果たしただけでなく、1920年中盤からのボリシェヴィズム紹介においても中心的役割を果たした雑誌であった<sup>(47)</sup>。

こうした雑誌の特徴に加えて、前述したように、日本でもボリシェヴィズム研究が進展していた1921年から朝鮮社会主義者がマルクス主義とボリシェヴィズムを本格的に紹介しはじめたことが時期的要因として作用し、『社会主義研究』の翻訳によってマルクス主義とボリシェヴィズム紹介の大半をまかなうという現象が生まれたと考えられるだろう。

## おわりに

ここまで検討してきたように、1920～1921年に活字媒体を通じて朝鮮に広がっていったマルクス主義学説は、その大半が日本書の翻訳、引用によるものであった。朝鮮社会主義者が紹介したマルクス主義学説の量と質は、彼らが所属していた共産主義グループの活動の変化に対応しており、1921年に入り共産主義グループの活動が活発化するとともに、マルクス主義紹介記事が量的に増加した。そうした量的増加にともない、翻訳の底本が総合雑誌の『解放』などから『社会主義研究』に変化することによって、質的にも大幅な向上を見せた。『社会主義研究』はマルクス主義とボリ

(46) 中国におけるマルクス主義、ボリシェヴィズム受容に関しては、石川禎浩、前掲書、第一章参照。

(47) 塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説』大月書店、1958、98-99頁。

シェヴィズムの同時紹介を可能にしたという点で、朝鮮のマルクス主義伝播において、極めて大きな役割を果たした文献であった。

中国と同様に、朝鮮でも日本経由によるマルクス主義紹介が展開されていたことが本稿を通じて初めて実証されたわけであるが、これにより、1920年代のはじめにおいても依然として日本が東アジアにおける西洋近代思想受容の中継所として機能していたことが、あらためて浮き彫りになったといえるだろう。とくに朝鮮の場合、マルクス主義に限らず、西洋近代思想の全般においても日本書に依拠して論じられており、三・一運動後の朝鮮知識人による新思想の啓蒙活動自体が、同時代の日本思想界と不可分な関係にあったといえる。また、中国とは異なり、朝鮮ではポリシェヴィズム紹介に関しても日本の文献に依拠してはじまったが、このことは、東アジアにおけるマルクス主義・ポリシェヴィズムの紹介方法に、日本のマルクス主義・ポリシェヴィズム研究水準が影響を及ぼしていたことを示唆するものである。

東アジアにおいて日本を中継所とした西洋近代思想受容構造が成立した背景には、西洋の「知」を受容するとき、まず日本の達成した成果を摂取することが効率的であるとの認識があった<sup>(48)</sup>。朝鮮におけるマルクス主義伝播との関連でいえば、日本で翻訳されたマルクス主義学術用語が朝鮮で最初から使用されたこと、明治以降のマルクス主義研究の基盤を基礎としてなされた日本のポリシェヴィズムに関する最新研究成果が、わずか2ヵ月後には朝鮮でも広がっていったことから明らかなように、朝鮮でのマルクス主義受容プロセスの短縮に日本書が果たした役割は極めて大きかった。朝鮮社会主義者は日本書を通じてマルクス主義を紹介した理由については言及しなかったが、マルクス主義を受容するための効率的な手段として日本書が選ばれたのは間違いないだろう。

しかし、東アジアにおいて、日本の成果は、あくまでも西洋の「知」そのものを受容するための効率的な手段に過ぎなかったという点も看過してはならない。1922年以降、朝鮮社会主義者はマルクス主義理解の向上にともない、マルクス主義を朝鮮社会に適用する方法を考察しはじめる。また、本稿で登場した社会主義者の何人かはロシアのヴェルフネウディンスクに渡っていく。マルクス主義の理解水準が向上し、日本のマルクス主義学説よりもより本質に近いソヴィエト・ロシアやコミンテルンのマルクス主義学説に接したとき、朝鮮社会主義者はいかにして朝鮮にマルクス主義学説を紹介していくのか。東アジアにおける日本を中継所とした西洋近代思想受容史の中で、朝鮮におけるマルクス主義伝播という事象を相対化していくためには、日本を経由したマルクス主義紹介からの離脱過程（離脱しないのであれば、その原因）が解明されなければならない。

また、日本書が朝鮮社会主義運動の展開において果たした役割は、あくまでもマルクス主義の理論的供給源としての役割に過ぎなかったという点も指摘しておかなければならない。1920～1921年のマルクス主義学説の量的質的变化と、共産主義グループの活動の変化に相関が見られる以上、

---

(48) 山室信一、前掲書、281-284頁参照。

(49) 高麗共産党創立の際、党の中央総監部の傘下に設置された、宣伝業務を担当する機関紙部の主幹は、金明植、兪鎮熙、尹滋瑛、朱鐘建の4名であった（イム・キョンソク、前掲書、380頁）。この4名のうち、金明植、兪鎮熙、尹滋瑛の3名が1921年に朝鮮の活字媒体でマルクス主義学説紹介を行った人物であることから、彼らのマルクス主義学説紹介と高麗共産党の活動に関連性があるのは間違いないと思われる。

1921年の本格的マルクス主義伝播を促した最も大きな要因は、共産主義グループの活動の活発化にあるといえる。既存の研究では、1921年に社会革命党が上海派高麗共産党国内支部に転換し、朝鮮共産党が活動を再開していく背景に関しては、資料的制約もあり詳しくは分かっていない。しかし、この時期に最大の勢力を有していた社会革命党の場合、上海派高麗共産党の国内支部への転換を契機として活動が活発化し、その延長線上でマルクス主義やボリシェヴィズム紹介がなされたのであり<sup>(49)</sup>、国内支部所属の社会主義者が1921年から本格的にマルクス主義学説紹介をはじめた背景に、コミンテルンや、上海派高麗共産党の前身である韓人社会党が深く関わっていたことは容易に想像がつく（ただし朝鮮共産党の場合、活動再開の事情を知り得る資料的な手がかりは、ほとんど残されていない）。

朝鮮社会主義者のマルクス主義研究や紹介を可能にしたのが日本書であったとしても、その朝鮮社会主義者をマルクス主義研究や紹介に向かわせた外的思想要因は、コミンテルンの動向や中国、ロシアなど亡命地域からはじまった朝鮮人社会主義運動との相関において考察されなければならない。1922年以降の分析も含めて、今後の課題としたい。

（おの・やすてる 京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

# 労働は神聖なり、 結合は勢力なり

—高野房太郎とその時代—

労働組合、生協運動先駆者の波瀾万丈の生涯

労働は神聖なり、  
結合は勢力なり  
—高野房太郎とその時代—  
二村一夫



労働組合、生協運動先駆者の  
劇的本格的評伝

20世紀を駆け抜けたその足跡をたどり、  
社会運動と労働運動の  
闘争闘争の日本労働運動史を書き換える意欲作

## 二村一夫

四六判・322頁 定価2940円(税込)

労働組合、生協運動の先駆者・高野房太郎(1869-1904)の生涯を、生い立ちから在米時代、運動家時代、運動離脱後まで描く初の本格的評伝。片山潜との関係を軸に黎明期日本労働運動史の真相に迫る意欲作。図版多数。

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5  
<http://www.iwanami.co.jp/>

岩波書店

